

## 博士學位論文要約

Summary of Doctoral dissertation

論文題目： カタツムリがうたうとき  
——沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びと——

氏名： 山本 真知子

### 要約：

本論の目的は、戦後沖縄運動史のなかで運動拠点の一つとして数え入れられてきた「やんばる」と呼ばれる沖縄島北部・東村高江の米軍ヘリパッド移設問題をとりまく運動を、傷を媒介した出逢いという磁場をもつ運動として検討するとともに、行為遂行的にこれを実践することにある。作家・山代巴は、敗戦直後に殻のなかに閉じこもり沈黙する人びとのありように「カタツムリ」をかさねあわせたが、本論は暴力にさらされていることを敏感に察知し反応してきた人びとの経験を聞き一書く過程に即してカタツムリ的な状況性を検討し、その今日的意義を示す。また山代に加え、鶴見良行と森崎和江の視点と方法を手がかりとして、既存の運動の物語をほどこき、一人ひとりの出逢いの場において一から編みなおしていくことを試みるものである。以下、各章の概要を記す。

第1章では、鶴見良行がきりひらいてきたフィールドワークの実践と理論をたどることを通して、知と運動の関係性を再考した。鶴見は東南アジアを歩くことを通して、資本主義によって分断されたひとやものを知っていくプロセスを重視し、そのなかに関係性や暮らしのあり方を根底から変えていく、独自の運動を確立しようとしていた。この点を踏まえ、前半で鶴見がいかに学知の枠を越えた運動を実践してきたか追い、後半で『ナマコの眼』（1990）に出てくる、生きものの視点から世界を見るという実践への接近方法として、米軍基地と軍隊がやんばるの森の生きものたちに与える影響を調査してきた、あるチョウ類研究者の経験をとりあげた。着目したのは、同チョウ類研究者がなぜ調査や研究に留まらず、工事車両や米軍車両の通行阻止や北部訓練場の返還地で発見された米軍廃棄物の返還などの「実力行使」をしてきたのかということだ。本章では、知るということが、チョウの視点から世界を見ることにつながり、さらに人間として果たすべき責任ある行動として、実力行使が選ばとられてきたことと、鶴見のフィールドワークもまた知が自分自身を含み込んだ場を変えようとするものであったことを指摘した。そこから、歩き、出逢い、知るという営みが、だれかやなにかの身になって考え、他者ととともに未来を考える出発点に立つ契機を生み出す可能性を照らしだした。

第2章では、運動が集団を主体として物語化されてきたことに問いを立て、個人の経験を通して運動を語りなおすことを試みた。そのひとつの方法として、本章前半では、東村高江や沖縄の基地問題に取り組んできた、還暦以上の沖縄移住者と首都圏在住者三人ずつの半生をたどり、「運動の高齢化」言説の問題を浮き彫りにした。あえて沖縄の反戦反基地運動で周縁化されてきた人たちをとりあげたのは、運動を語るときに住民やその土地の出

身者を主体とする暗黙の了解に対抗するためでもあった。これは、謝花直美が戦後沖縄の運動史に記録されてこなかった人びとがのこしてきた「異音」に耳を傾け、復興過程で移動を余儀なくされる人びとの「流動する生活圏」を書き起こしたことに接続される視点でもあるだろう。高江の座り込みも、暴力を予感しながらともに生き延びていく方法を模索する種々の運動にかかわってきた人びとが流れ着いてきた場所であり、各地で展開される沖縄に連帯する動きによって支えられてきた場所でもある。しかし、運動の高齢化というフレーミングは、運動の場に集う人びとがもつ経験の豊かさをあらかじめ排除し、不可視化してきた。本章はそこに、傷つかないようにカタツムリのように殻のなかに閉じこもっているうちにゾンビ化してしまうという現象を捉え、問題として提起した。

そして後半では、すでに聞いた話を聞きそこなっていたかもしれないと事後的に気づき、出逢いなおしていくなかで、そのゾンビ化したカタツムリ的存在が蘇生するかもしれない可能性を検討した。具体的には、元ハンセン病患者の父をもつ息子のナラティヴを聞き一書く過程で浮上してきたことばの秩序の問題に接続して考えた。アカデミズムにおいて経験を語る一聞くという行為——殊に、歴史的出来事を伝える証言——には、記憶の正しさをめぐる議論や解釈の対象物とする風潮が根強くのこっている。これに対し本章では、宮城晴美が『母の遺したもの』で示した、解釈や批判を前提に経験を聞くのではなく、ただ聞き、受けとめる場所を確保することの重要性に立ち返り、聞きとりにおける聞くという行為のあり方、すなわち聞きそこないという気づきを通して変わっていく関係性に希望を見出した。

第3章では、座り込みの場と沖縄戦体験者の家族という二つの視点と実践から、体験者の記憶をいかに継承していくかという問いを深めた。とりあげたのは、高江の座り込みに参加するなかで、2007年の教科書検定問題を受けて朝鮮人慰安婦について証言した、沖縄戦体験者（の記憶）である。基地ゲート前の座り込みの場では、体験者のることばが運動を支える特別な位置を占めてきた。だがそこには、沖縄の慰安婦や集団自決にかかわる証言が、「被害を解釈していく議論の構図」のなかで絶えず要求されてきたという、洪琬伸の指摘に通ずる問題が潜んでいた。そこで本章では、その議論の構図が運動の内部においていかに再生産され、ことばになりえなかったものを締め出していく言語秩序を形成してきたのか考察した。そして、その体験者の家族がどのようにかれの見せる奇妙な言動を受けとめてきたのか検討することを通して、沖縄戦を生き延びた痛みを抱えるかれが生き延びていくには、奇妙な言動を認知症やPTSDの症状としてではなく、さらに言えば狂気としてではなく、記憶のあらわれとして受けとめる存在や関係性が不可欠だったことを明らかにした。

本章後半では、戦争体験者の死後、のこされた記憶の断片をどうしたらいいか考えるために、川村邦光の弔い論を踏襲し、体験者と家族、筆者がそれぞれどのように亡霊を歓待してきたかとりあげた。認知症やPTSDの症状とみなされてきた言動のなかに、亡霊となってよみがえる死者たちを弔う、あるいは弔いなおそうとする瞬間があっただろうことや、そのかれのなかで生きつづける亡霊を家族がいっしょに歓待してきたこと、そしてそうした記憶をたどる筆者の聞きとりも、亡霊たちの証言の場であり、弔いの場になっていたかもしれないことを示した。

第4章では、運動における「連帯」を考える方法として、森崎の聞き書きと沖縄を考える視座と実践、そしてかの女がつくってきたおしゃべりの場を検討する。植民地朝鮮で生まれ育った森崎は、敗戦後、植民者二世の原罪意識を抱え込み、国家ありきではない「ふるさと」や「にほん」を探し求め、地底で過酷な労働をしてきた元炭坑労働者たちの聞き書きをはじめた。そうして肉体と精神に刻み込まれてきたもののなかにことばを生みだし、労働を基盤とした関係性を照らしだそうとしていたのである。それは、沖縄の「本土復帰」前の数年間、筑豊・北九州の若い労働者たちとともに「おきなわを考える会」で活動するときにも、重要な視点として貫かれることになっていった。当時、沖縄では米軍占領下のあらゆる労働が「人間の収奪」だという共通認識があり、賃労働に自己を託さず、労働経験から生まれる「内発的想像力」によって未来をたぐりよせ、集団となってあらわれる、政治的なたたかいが築かれていた。そうしたなか、沖縄の復帰をめぐる動きはそれまで日本や米軍によってもたらされてきた痛みやかなしみ、恨み、怒りがあらわれたものであり、かの女はそれを「イナゴの大群のようにおそう図」として、あるいは沖縄戦での「殺人行為の摘発」として受けとめる。

本章では、同時期に森崎が執筆活動に留まらず、地域の労働者たちとの対話の場をつくりながら、北九州の労働経験を掘り起こしていくなかで、沖縄を考える営みを深めようとしていたことに注目し、その対話あるいはおしゃべりが、どのように「労働(創造的生存)」と森崎が呼ぶものに関係しているのか検討した。そして、かの女が自宅に集まってくる者たちとの対話を通して、心身に負った傷を媒介して、自律的に関係性や思想を生みだしていく共同的な営為をきりひらいたことを示した。

また後半では、当時、森崎の自宅に出入りしはじめたある沖縄出身の大学生の視点から、森崎のもとでおしゃべりすることが、生きていくうえでどんな意味をもってきたか考えた。かれは「オキナワマンガタミー」という、植民地的状況がつづくなかで、沖縄にかかわるあらゆるものをその身に背負い込んだ状態にあった。だが、この森崎との対話の場に身を置くようになってから、孤独に抱え込みつづけてきた苦悩を少しずつ言語化していく。本章では、それに連なる実践が、名護市辺野古と高江の運動の場で試みられてきたことを捉え、おしゃべりの場がもつ可能性を示唆した。

第5章では、座り込みテントという場が、軍事的暴力を察知した者たちが集い、出逢う場として確保されてきたことの意味を考える。具体的な事例として、2019年に二度米軍によってテントが強制的に排除されたことをとりあげ、それへの抵抗としてくりかえしテントが張りなおされてきたことと、政府交渉という場が設定されてきたことに着目した。前者は建てなおしたテントが再び奪われる可能性がぬぐえず、後者は政府側が交渉のテーブルにつき、聞く耳をもっているようにふるまっていたとしても、良好な日米同盟関係の維持に努めることに変わりはない。だがそれでもテントは建てなおされ、交渉の場はつくられてきた。本章は、伊江島の土地闘争のなかに「殺されないための言葉の空間を確保するたたかい」を見出した岡本直美の指摘を手がかりとして、高江ではいまもなおことばを発しなければ、生きることが危ぶまれており、そのようななかテントという場所が形成・維持されつづけていることの意義を捉えた。

本章後半では、高江に住みながら座り込みをしてきた住民への聞きとりを通して、座り

込みテントでの出逢いがいかに生を支える大事な関係をもたらしてきたのかたどった。2015年2月に新設された2ヶ所のヘリパッドが先行提供されると、MV-22 オスプレイの飛行訓練が激化し、自宅からの「避難」を余儀なくされる。いくら声をあげても聞かれることはなく、ついに住めなくなったことに絶望していたかの女は、2017年6月にグアムの実弾射撃訓練場建設に反対してきた人たちが高江の座り込みテントに訪れ、かの女の声をちゃんと受けとめてくれたことに「一筋の光」を見出す。そこから、住民の会のメンバーとグアムだけでなく、琉球弧の島じまに足を運び、「軍事拡大に反対する共同声明」を発表するなど、連帯の動きを強めていった。

以上のような経験から、座り込みテントが、痛みを媒介してつながる他者とともにいまいる場所の内部に自分たちが生き延びていける、生きていきたいと思える「別の世界」を創出しようと脱出が試みられてきた場所であったことを照らしだした。

第6章では、地域のなかで暮らしながら運動することの困難さに着目し、暮らしと運動の関係を再考する。その方法として、本章前半では山代巴の「民話」をめぐる実践をたどった。山代は、敗戦後の農村で、女性たちが沈黙をまもりつづけているところに、ファシストが労働者や農民をくりかえし痛めつけ、カタツムリのように殻のなかに閉じこもらせたまま戦場に駆り出していったことを読み込んでいた。民主主義がうたわれる一方で、封建的で軍国主義的な価値観が内面化されたまま、最低限の人権意識さえ根付いていないことに気づいたかの女は、気になる言動を写しとり、聴衆の前で実演しはじめる。そうすることを通して、内省の機会をつくり、人権意識を育て、現状を変えるべく試みをかさねたのだ。本章で注目したのは、そうした実践が「平和の問題」を考えるなかで遂行されていたことである。山代は、原爆被害者の詩集や手記集の編集に携わるなかで、ほんとうに言いたいことが言えないなかで民話が用いられることに目を留め、さらに自身もかかわっていた原水爆禁止運動の草創期には、死者の声がよみがえってくることを看取り、だれのことかわからないように経験を語り継ぐ民話化に希望を見出すようになっていった。

このように山代の実践を概観したうえで、後半では、まず東村とグアム在住の人びとが、それぞれどのように軍事基地の近傍で暮らすなかで問題を掘り起こし、現状を変えようとしてきたか、その過程で身近な人たちの無理解に苦しみながら、いかに自ら身を置く状況や関係を変えようとしてきたかを追い、つぎに「ヘリパッドいらない」住民の会のメンバーの経験をたどった。後者で焦点を当てたのは、座り込みの場で得たつながりがあったからこそ、地域内の分断と対立に屈することなく活動しつづけられたことと、ヘリパッド問題にかかわるなかで経験してきた暴力を、沖縄戦前夜に親族が経験した言論弾圧の記憶と地続きのものとして捉え、警告してきたことだ。

本章では、こうして軍事基地の近傍で暮らすなかで運動をきりひらいてきた人たちの経験をたどっていく過程を通して、暴力を察知し、傷の痛みを感じながら、未来を先取りして動き、生き延びていくことの重要性を再確認した。そして、そのようなサバイバル術をカタツムリのススメと呼び、傷つきやすく臆病なカタツムリ的領域を抱えたままともにたたかう意味を強調した。

本論は、沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びとが、軍事的暴力を感知し、ともに生き延びようとしてきたプロセスに着目し、カタツムリ的状况性に即してこれを描きだした。

カタツムリがうたうとき、そこには痛みが抱え込まれている。だが、そこから生まれるリズムや旋律、響きは、容易に言語化できない経験のなかにことばを生みだそうとするなかであらわれる痛みを内包し、それが受けとめられはじめる契機になりえる。本論は、既存の言論空間から締め出されていくなかで、沈黙の領域に抱え込まれてきたたがいの痛みを媒介して出逢い、つながっていく関係性が、現状を内側から変えていく可能性を見出すとともに、これを実践しようとしたものである。